

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-33C	12-025	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)		
The effect of alcohol abuse and alcohol withdrawal on short-term outcomes and cost of care after head and neck cancer surgery 頭頸部がん術後におけるアルコール乱用と離脱症候群が短期的な転帰と医療費にもたらす影響について		
執筆者		
Genther DJ, Gourin CG		
掲載誌		
Laryngoscope. 2012 Aug;122(8):1739-47.		
キーワード		
アルコール乱用、離脱症候群、頭頸部がん、合併症、外科		
要 旨		
目的： アルコール乱用は外科の患者の術後合併症の増加因子であり、頭頸部がん発症の危険因子である。アルコール乱用と入院中の死亡、術後合併症、入院期間、頭頸部がん手術費の関係について研究を行った。		
方法： 後ろ向き断面調査を実施した。2003年から2008年にかけて口腔・咽頭部のがんを切除した18歳以上の患者92,312名の退院記録をクロス集計と重回帰モデルを用いて分析した。		
結果： アルコール乱用者は合併症が多く、大手術を要することが多く、退院後に他施設や自宅での療養をより要する傾向があった。アルコール離脱症候群患者は急性の合併症(OR=5.6, P<0.001)、術後合併症(OR=2.3, P<0.001)を来し易かった。変数を調整した後、アルコール乱用者・アルコール離脱症候群患者ともに病院死に有意な差はなかったが、乱用者・離脱症候群ともに有意に入院期間が長引き、入院費用が増加し、また、離脱症候群は入院期間と費用の単独で最も影響の強い要因であった。		
結論： 頭頸部がん患者では、アルコール離脱症候群は術後医療・術後合併症を増加させ、入院期間・入院費を増大させた。アルコール乱用者がアルコール離脱症候群に至らないよう積極的に取り組む必要性が示された。		